

人文学部の  
今を伝える

# Agora

人文ニュース<アゴラ>

44巻2号  
山形大学人文学部  
2012.12.14

"AGORA"とは、ギリシャ語で"広場"という意味です。

人文ニュース 第44巻2号 <http://www-h.yamagata-u.ac.jp/agora/index.htm>



写真左：開式式で挨拶を述べる結城学長  
写真上：ナスカ市内に建設されたナスカ研究所

## 山形大学「ナスカ研究所」開設

現地時間の10月30日(火)、ペルー共和国に「山形大学人文学部附属 ナスカ研究所」が開設いたしました。



日本から空輸した研究所のプレート



山形大学人文学部  
facebookページ  
開設いたしました!  
ぜひご覧ください。



北川学部長等関係者による集合写真(ナスカ研究所屋上)



明るい雰囲気の研究所玄関

## 山形大花火大会を支えました!

法経政策学科4年 北郷 杉さん

私が所属しているボランティアサークル「山形大学JCC」では、山形で毎年行われている山形大花火大会の運営のサポートを行っています。単にボランティアとして参加しているのではなく、募金活動やPR活動、会場設営、当日の警備、そして後片付けまでそれぞれが花火大会のスタッフとしての責任感を持ち活動しています。このように山形市の夏の一大イベントである山形大花火大会をスタッフとして支えるということは大学ではなかなか味わうことのできない貴重な経験となっています。



# 哲学と記号と情報と…

学科長  
インタビュー

清塚邦彦  
人間文化学科長・教授(哲学)



——先生のご専門は何ですか？

清塚：研究面での専門分野は哲学です。

——哲学とは、どのような分野なのでしょうか？

清塚：当然の質問ですが、なかなか答えにくい質問もあります。

たとえば「長嶋茂雄の野球哲学」といったことが言われるときには、「哲学」はたんに「基本的な考え方」と言い換えても大きな違いはないでしょう。もっと言い換えると、野球人生を送る中で身につけた一連の教訓、とでもなるでしょうか。だれもが人生を送る中でいろいろなことを経験し、学ぶという意味では、だれにもその人なりの哲学があるかもしれません。ただし一般的な言葉遣いでは、立派な人物として評判の高い人が身につけた（そして他の人々の参考になりそうな）教訓がいわば尊称として「哲学」と呼ばれるようですね。

とはいっても、大学で哲学を教える教師はけっして、自分の人生訓を述べているわけではありません。もちろん、自分の人生経験が人々の模範になるなどとも考えていません。大学で教えられる哲学はあくまで学問の一分野です。ただ、ここで最初の質問に戻ってしまいますね。つまり、それはどのような分野なのでしょうか、と。

いちおう語源を考えておきましょう。「哲学」は「philosophy」の訳語で、語源的には、知(sophia)を愛好する(philein)活動を指すのだと言われます。そのような説明からすれば、哲学とはつまり学問の総称とも言えます。ただ、学問の多様な分野の中で、問い合わせの立て方や答え方が定型化されて、いわばルーチンワーク的な研究ができるようになった領域は、それぞれ「〇〇学」と称して独立していきます。結果として、どう答えたらいいか分からぬ——そもそもどんなふうに問い合わせを立てたらいいのかも分からぬ——難問ばかりがあとに残されてしまった。大雑把に言えば、その残された難問を扱うのが狭い意味での哲学です。口の悪い人なら、これまでのところめざましい成果が得られていない問題のたまり場、と言うかもしれません。個人的には、今後もさまざまな領域がそこからわき出してくる活火山の火口というふうに考えたいのですが。(じっさい、私が最初に取り組んだ「言語哲学」と呼ばれる分野では、もともとは哲学者が提唱した考え方や方法論が、しだいに哲学者の手を離れて、言語学の一分野として独り立ちしていくという現象が、ここ何十年かのあいだにも起こっています。)

——授業では、どのような内容を扱っているのですか？

清塚：教育面では、哲学専修に加えて人間情報科学専修も兼任していますので、知識・情報の表現ということと関連するお話をすることが多いですね。たとえば記号論理学の紹介ですか、言葉の働きと関連するお話ですか。また文学や絵画作品を例に記号論の話をすることもあります。記号論理学のような理科系の

素材から、文学や絵画のようないかにも文科系的なテーマまで、いろいろな話を取り上げますので、学生からはちょっと捉え所のない教員に見えているかもしれませんね。

——先生は人間文化学科の学科長をされているわけですが、学科の魅力はどこにあると思われますか？

清塚：人間文化学科では、人間の文化的活動という共通の主題について、さまざまな視点から、さまざまな手法をもちいて研究・教育が行われています。同じ主題について多様な視点からの研究に触れることができるところが、陳腐に聞こえるかもしれません、人間文化学科の基本的な魅力だと思います。

きちんと調査したわけではありませんが、次のような幻想——私は幻想だと思うのですが——を抱いている方は、意外に多いのではないでしょうか。つまり、たとえば心を扱うのは心理学、歴史を扱うのは歴史学、社会を扱うのは社会学というふうに、学問分野というのは、特定の主題ごとに一対一に対応づけて用意されている、という考えです。しかしへんには、たとえば心は心理学だけの問題ではなく、哲学でも大きな問題ですし、言語学や社会学、文学研究や文化論など、多様な分野においてそれぞれ異なる形で問題になります。それぞれの学問分野を区別するのには、主題よりもむしろ研究手法だというほうが正確です。心について解説するさいに、心理学者は具体的な実験方法に即した経験的分析を重視するのに対して、哲学者は概念分析に専念し、言語学者は心理とかかわる各種の語法を分析し、文学研究や文化論、芸術論では心の多様な表現が分析される、というふうにです。こうしたちがいは研究者の気質のちがいとも関連していますので、各専修の空気のちがいは、どこか文化圏のちがいを思わせる所があります。本学科のカリキュラムは比較的自由ですから、学生は自分が主たる専門とする分野以外についてもさまざまな授業科目を履修することができます。いわば、学科内での異文化体験の機会がふんだんに用意されているわけです。

——最後に、これを読んでいる方々へメッセージをお願いいたします。

清塚：どうも本日は教室の中での教育内容の話ばかりをしてしまったようです。が、近年では、学部のカリキュラムの中に、地域社会と接する場としての「インターンシップ」や「地域作り特別演習」ですか、海外の大学に出かける場としての「異文化間コミュニケーション」といった科目が盛り込まれています。単なる就職指導ではなく、社会の中での自分の役割や居場所についてじっくり考える場としてのキャリア科目もあります。そうした多様な学びの機会を積極的に活用することで、教室での授業についても新鮮な目を向けられるようになっていただければ幸いで

# 学生時代の思い出と 今の学生に望むこと

**星野 修**  
法経政策学科長・教授(西洋政治思想史)



——先生のご専門は？

**星野**:西洋政治思想史ですが、20世紀前半のドイツ、しかもウェーバーとシュミットという特定の政治思想家を中心に研究してきました。

——そうした研究を志した動機はなんですか？

**星野**:それは学生時代の思い出と重なるのですが、西洋政治思想史の宮田光雄教授の講義を受講し、圧倒されたことに始まります。当時、先生は40代後半でしたが、すでに学士院賞と吉野作造賞を受賞され、また学生伝道のために自宅で聖書研究会を日曜日毎に開かれている著名な無教会キリスト者でした。先生の講義は、当時の法学部にあって全く異色なもので、講義室はしばしば嘲笑の渦に包まれていました。(一般に、法学部の教授たちの講義は、開始のベルと同時に始まり、終了のベルと同時に終わりましたが、時間に厳格なだけではなく、講義内容も厳格というか厳肅で、100分間しづかひとつなく、学生達がノートに筆記する音だけがきこえるような感じでした。)

私は、日本政治を専攻したいと思っていましたし、先生のキリスト教信仰に対しても距離感を抱いておりましたが、2年生の後期に法学部の政治学の先生たち4人による比較政治文化論の講義で初めて宮田先生に出会いました。宮田先生は、「西ドイツの政治文化」と題する講義を3回にわたって行いました。問題設定の明確さ、スリリングな謎ときのような分析の鮮やかさ、そして聴くものをしばしば笑いの渦に引き込むユーモアあふれる語り口に、魅了され、講義終了後も茫然とするような思いを抱きました。あれから40年近くたったいまでも、あの時の感動を覚えています。それがこの道に踏み迷うようになった出発点です。(今日の政治学では、こうした「本質主義的」な前提からのアプローチは絶えて行われなくなったのですが、当時はアメリカ政治学の輸入時代のためか大流行りで、時代を反映したものだったといえます。)それで2年生の終わりに先生の演習参加を希望したのですが、希望者が多く、演習がドイツ語文献を用いるものだったので、ドイツ語の試験による選抜を経て参加が許可され、うれしくてたまらなかったこともまた記憶しています。(ただし、それからはイバラの道が続くのですが、それはここでは省略します。)

——法経政策学科の学生達に何をのぞみますか？

**星野**:1、2年生にはとにかく好きな専門領域を見つけ、コース

を決めてもらい、また2年次の終わりに所属演習を決めてもらいたいですね。3、4年になってからも、どんなにつらい勉強でも好きならば懸命にやれるし、がんばっていけると思うからです。幸い、うちの学科は、法律コース、経済・経営コース、公共政策コースと、3つの教育コースを備え、また各コースとも多彩な科目をそろえていますので、なんとか好きな専門科目をみつけてもらえるのではないかと思います。3、4年次は、所属ゼミ中心の学生生活ですが、そこでは勉強だけではなく、ゼミコンバ(花見コンバや芋煮会を行うゼミも少なくありません)やゼミ旅行も行われ、学生生活を謳歌できると思います。近年は、就職活動が3年後期に始まり、3年後期の終わりごろから4年前期に活動が本格化し、その間ゼミでの勉強に学生たちが全力を注げないのは極めて残念です。

——先生の講義はどんな感じですか？

**星野**:それを聞かれると正直つらいものもありますが、私自身も、(学生時代以来の宮田先生の学恩に少しでも報いるためにも)スリリングで興味あふれる講義をする努力を惜しまないつもりでやっています。最近は、一方的に教壇で講義するだけではなく、かの有名なハーバードのサンデル教授をまねて(サンデル教授の名人芸には、無論、遠く及ばないのですが)、講義中にしばしば学生達に問い合わせて、対話を試みています。しかも、これが意外と楽しいという大発見もしました。(学生たちの反応もそれほど悪くはない感じです。)学生達にも主体的に(強制的に?)講義に参加し、考えてもらいたいからです。



星野ゼミ(比較政治学演習)のみなさん

# —地域に根ざし世界を目指す—

## 研究プロジェクト1

### 長井市の活性化に向けて

地理学は地域の成り立ちを説明し将来を予測する科学です。複雑な分析を行う場合もありますが、どのような分析を行うにしても、最初に行う作業は現地に行くことです。なぜ、現地に行かなければならぬのでしょうか。地域を理解するためには、そこで生活する住民と同じ経験をする必要があるからです。現地に行き、辿り着くだけで大変であることを実感して、初めて「交通の便が悪い」という記述が生まれます。

2009年長井市との連携協定は、山田の研究においても、所属する地理学専修での教育においても大きな一歩でありました。同協定は現地調査への大きな足掛かりになったことはもちろん、まちづくり、農村振興、先端技術開発などに携わる住民や彼らを積極的にサポートする市職員の方たちと顔を合わせる機会が増えたことによって、地方都市の抱える問題点や今後の方向性を考えるために必要な多くの着眼点や発想を得ました。その結果、住民の行動を考慮した駅

周辺開発のシミュレーションや残存する大土地所有が中心市街地の活性化に及ぼす影響といった従来なかなか答えなかった研究を進めることができました。

また、地理学専修で



真夏のワラジ作り体験

は、2009年度、街中散策を行うグループがブログに体験を書き込み、情報を外部に発信しながら、それを共有していくシステムの可能性を、実際に学生が街中散策を行って検証しました。2010年度には農村域に対する調査を行い、江戸時代に建設された堰の見学や、現代の多様なニーズに対応しようとしている農業経営者からのお話をまとめて、現地で報告会を行いました。2011年度は、大規模小売店の撤退や街路の幅員拡張事業で揺れる中心商店街を対象にして店主の意識調査を行い、活性化への方策を演習の課題としました。

研究や教育での成果は、長井市の経済再生戦略会議や同市が主催する「ながい未来塾」で、住民の方々にも還元できたと思います。さらには、これらの事業に携わってきた法律、経済系の教員らと共に、2012年度は長井市からの調査研究を受託し、同市の第5次総合計画策定に関わる提言を行っています。早いもので



極寒の除雪体験

人間文化学科  
**山田浩久** 教授(地理学)

長井市との関係も5年になりました。長井市との連携協定は、文字通り「地域にねざした」学部全体での地域貢献事業を可能にした本学の特筆すべき取組みだと確信します。

## 研究プロジェクト2

### 邦銀のアジア進出と国際競争力

邦銀の海外攻勢が再び注目を集めています。メガバンクによるベトナムの銀行への出資、欧州系銀行からの資産買収、プロジェクト・ファイナンスにおけるグローバル・ランキングの上昇といったニュースを目にするようになりました。リーマンショックや欧州債務危機に苦しむ欧米系銀行を尻目に、邦銀は公的資金を完済した2000年代半ばから躍進を続けています。絶好調に見える邦銀ですが、海外、とりわけアジアにおいて欧米系銀行を凌駕する優位性を本当に発揮できているのでしょうか。

現在、科学研究費補助金を得て、この課題に答えるべく調査・研究を進めています。主に2つの分析を行っており、1つはアジア諸国におけるメガバンクの競争力をX非効率性の計測から明らかにしたり、シンジケート・ローンやプロジェクト・ファイナンスといった金融プロダクト市場における競争上の位置づけを計量的手法によって特定する分析です。

もう1つはアジアへの進出が顕著な地方銀行を取り上げ、中小企業の海外進出支援に対して果たす役割を調査しました。この分析では地方銀行25行への電話インタビューを敢行してデータを収集しました。また、本年2月と7月には上海において現地調査を行い、地方銀行の駐在員事務所の実態について現場の行員にインタビューしています。

法経政策学科  
**山口昌樹** 准教授(国際金融論)

邦銀の海外展開は日本の成長戦略と密接に関わっています。2010年に閣議決定された新成長戦略において金融業は戦略分野の1つに位置づけられ、邦銀がアジアにおいて存在感を高めることが期待されています。学界でも邦銀の国際競争力は注目を集めるトピックとなりつつあり、私は本年の日本金融学会秋季大会に招待されて「アジアにおける外国銀行の展開」というテーマで研究発表をしました。研究の成果は山形大学人文科学部叢書の第1巻『邦銀のアジア進出と国際競争力』としてこの秋に発刊されました。今後も、日本の成長戦略に関する重要な意義を持つ研究として邦銀の国際競争力を分析していきます。



上海の繁華街・南京東路にて

# 研究教育活動の紹介

人間文化学科 鈴木 亨 教授  
(英語学)



——英語の逸脱的な表現について研究されているそうですが、具体的にはどういうものですか？

鈴木：動詞は本来、自動詞や他動詞など大まかに文法的な用法と意味が決まっていますが、動詞と目的語の意味関係がずれてしまう事例があります (He kissed these questions from her lips／彼女にキスをして質問を封じた)。ここで彼がキスをするのは、目的語の「質問」ではありません。学校文法的な観点からは戸惑ってしまいますか、母語話者であればこのような表現を無理なく解釈できてしまうのが不思議なところです。

——そのような表現を研究する面白さは何でしょうか？

鈴木：ことばを使うときには、意識して覚えた部分よりも、無意識に構築された全体のしくみ (=文法) が大きな働きをしています。文法には言語活動を制約する枠としての側面と、状況に応じて自由な表現を生み出す装置としての創造的な側面があります。逸脱的な言語表現はこの一見相反する二つの性質がせめぎあう場であり、そこからことばの真の姿が見えてくると思います。

人間文化学科 菊地 仁 教授  
(日本文学)



——先生のご専門は日本文学ということですが、具体的に何を研究されていらっしゃるのでしょうか？

菊地：日本古典文学、それと口承文芸いわゆる民話です。

——古典文学は学校でも勉強する機会が多くありますが、口承文芸にふれる機会はなかなかありません。なぜそのような口承文芸に興味を持たれたのでしょうか？

菊地：ごく簡単に言えば、出身大学院の学風からの影響です。もっとも、最初は、民俗学的な発想法にちょっとはじめないこともあります。ですが、考えてみれば、書かれた文学に対して書かれなかった文学としての口承文芸があってもよいわけです。いわゆる説話文学作品のなかには、現代の都市伝説のような噂話がたまたま記録された例も少なくありません。よく言われますが、私にとっても、紫式部の創作した『源氏物語』と柳田国男の編集した『遠野物語』とを同列に扱える研究方法が理想なのです。

法経政策学科 安田 均 教授  
(経済原論)



——経済原論とはどういう学問なのでしょうか？

安田：私が研究している経済原論というのは資本主義経済の基本的メカニズムを解明する学問です。例えばなぜ貨幣は通用するのか、景気はなぜ好況と不況を繰り返すのか、当り前のことですが根本的原因がわからないことが多いのです。

——経済原論を研究する上での面白さは何ですか？

安田：資本主義経済の発展自体に個々人の行動が深く関わっていることが浮かび上がってくる点です。好況がいつまでも続かないのは、今まで以上に多く投資してもっと儲けたいという資本家の行動であり、貨幣が通用するのは単に法律によって強制するからではなく、根本的には自分の商品をより多くの他の商品と交換したいという商品所有者たちの行動が誰からも交換に求められる商品を貨幣に押し上げるからなのです。自然法則は人々の意思や行動に関係なく貫徹しますが、経済法則は人々の行動がその意図せざる結果として人々の行動を律するというものなのです。すると現実の経済問題（失業や格差など）の解決も、政策を外的に適用するだけでは不十分で、自分たちの行動を見直すことが不可欠となります。

法経政策学科 西岡 正樹 講師  
(刑法学)



——刑法ではどのようなことを取り扱うのですか？

西岡：刑法は犯罪と刑罰を規定する法ですが、刑法では、主として、殺人や窃盗といった個々の犯罪に共通する成立要件の検討および刑罰に関する諸問題の考察を中心とする刑法総論と、個々の犯罪が個別に有する成立要件の検討を行う刑法各論を学問として取り扱います。

——刑法に興味を持ったきっかけは何ですか？ 研究の面白さはどこにあるのですか？

西岡：学部時代に刑法の講義を受講した際に、難解な用語が頻出し学説の対立も激しく厄介だなと思いつつも、その点に学問的な魅力を感じました。私が研究テーマに選んだ責任論や刑罰論は、「ある人を法的に非難することができるということは、その人が違法な行為以外の適法な行為をなすことができた、ということを前提にしているが、そもそも人間にある特定の行為をなすという意思の自由は存在するのか」とか、「そもそも国家が犯罪者に対して刑罰を賦科することは如何なる根拠をもって正当化されるのか」といった哲学的な問題をも含み得るものであり、そこに研究の面白さがあると感じています。

8/25  
成田空港発

# オーストラリア ケアンズ研修の旅 ～異文化間コミュニケーションIを終えて～

2012年8月25日から9月15日まで、人文学部の学生26名が  
オーストラリア・ケアンズにて、異文化コミュニケーションIを行いました。  
研修では、毎日のホームステイを通して現地の生活を体験しました。  
さらにジェイムズクック大学(JCU)の語学センターで英語の授業と、  
ケアンズの文化や自然を知るいくつかのツアーに参加しました。

ホストファミリーへの  
お土産にトロの風鈴とぬいぐるみを持っていったところ  
大変気に入ってくれました。かわいいは  
万国共通なんだと思いました。



ホストファミリーとは  
本当に家族のように過ごしました。  
英語でのコミュニケーションの良い練習にもなったし、  
ホームステイして良かったです。

私は日本史について  
英語で話すという経験が印象的でした。  
すごく達成感があり、自分の勉強してきたことの  
結晶を見た気がしました。



ホームステイを通して、  
英語や現地の文化を楽しみながら  
学ぶことができました。  
ケアンズに行って本当に良かったです。



初めて経験する日本語が  
まったく通じない環境に戸惑いましたが、  
ホストファミリーの方がとても優しくて  
安心して生活できました。



美しい海で泳いたり一人で  
ホームステイをしたりとどれも貴重な体験で、  
楽しみながら様々なことを学べた  
3週間でした！

異なる国の育ちでも  
通じ合えた時の喜びは大きい。  
ホームステイ先の娘さんはもう妹のようだ。  
共にチャレンジしたかけがえのない仲間もでき、  
素晴らしい実習だった。



JCUの先生方、そして私の英語の  
先生になってくれたホストファミリーの  
皆のおかげで充実した英語漬けの3週間を  
過ごすことができました。



私が最も  
衝撃を受けたのは生活時間のズレでした。  
就寝時間、起床時間共に早く、慣れるのに  
1週間程かかりました。

日本とは違い、  
オーストラリアでは朝食は軽食で、  
夜に豪勢な料理でした。だから、あのダイナミックな  
体つきになると思いました(笑)



ケアンズではJCUで英語を楽しく学べると共に、  
オーストラリアの美しい観光名所を回ることができ  
とてもよい経験になりました。

day	am	pm
8/25 sat		成田空港発 21:15
26 sun	ケアンズ空港着 ホストファミリーと対面	ホストファミリーとの活動
27 mon	JCUキャンバスツアー 英語プレースメントテスト	ケアンズ市内観光
28 tue	英語授業	英語授業
29 wed	英語授業	観光 (バーム・コープ・ビーチ)
30 thu	英語授業	英語授業
31 fri	英語授業	観光 (リーフ・ティーチ)
9/1-2 sat sun	ホストファミリーとの活動	
3 mon	英語授業	観光 (ケアンズ・トロピカルズー)
4 tue	英語授業	英語授業
5 wed	英語授業	英語授業
6 thu	観光(グレートバリアリーフ、グリーン島)	
7 fri	英語授業	英語授業
8-9 sat sun	ホストファミリーとの活動	
10 mon	英語授業	英語授業
11 tue	観光(キュランダ)	
12 wed	英語授業	英語授業
13 thu	英語授業	観光 (エスプラネード・ラグーン)
14 fri	英語授業終了 観光(ラフティーズ・マーケット)買い物	BBQランチ(送別会) 卒業式
15 sat	ケアンズ空港集合	13:20 ケアンズ空港発 20:00 成田空港着 解散



今回の研修では、自分のつたない英語が相手に通じ、言いたいことを分かってもらえた時の喜びを体験することができて良かったです。



9/15 成田空港着



私がケアンズへ3週間の短期留学をして、一番日本との違いを感じたことは、やはり「食文化」についてでした。食に対する考え方の点でも違いを感じました。

今回の実習が私にとって初めての海外旅行でした。日本との違いで驚いたのはオーストラリアのゴミ収集がハイテクだった事です。

3週間で英語力が飛躍的に伸びることはない。しかし、自分に足りない能力を見極めることはできた。継続した学習が大切だ。



行くことで見えてくる本当の英語力。体験した人にしか味わえない生の英語での生活、自分への良い糧になることは間違いありません。

オーストラリアの学校での学習はとても有意義なものでした。会話やコミュニケーションが中心で、英語が身についたことを実感しました。このような体験をさせていただけたことに感謝します。



私にとっては、初の留学で心配していましたが、その心配は杞憂に終わりました。ケアンズは暖かく過ごしやすく、そして、海や山などもとてもきれいで感動しました。中でも多くの場所を観光できたので、ケアンズを詳しく知ることができました。そして何より、英語の学習は大学はもちろん、ホストファミリーの方と会話を通して楽しみながら学ぶことができました。この研修は私にとって有意義なものになりました。

ホームステイを通して新しい家族ができる、オーストラリアの生活を実際に体験することもでき、いい経験になった。



発音が適當でも相手は理解してくれると思い込んでいたが、間違った発音で名前を呼ばれたとき、全くわかりませんでした。発音も大事ですね。



異国之地に、第2の家族が出来ました!!逆ホームシックになってしまふくらいの、筆舌に尽くし難い3週間でした!!

私のホストファミリーの仕事は、砂浜での結婚式のセッティングすること。私もお手伝いをしたのですが、それは素晴らしいものでした。



# 留学生のキャンパスライフポート

## 山形大学で学んだこと

私は邵新宇と申します。山形大学人文学部法経政策学科の4年生で、ゼミは会計学です。

中国で会計学を勉強した私は、国際的な視点で、会計学の先進的な学問を研究するために日本にきました。憧れている山形大学に入るため、日本語学校では日本語を中心に勉強してきたので、正式に日本という国を理解しようとしたのは、山形大学に入学してからです。

入学したばかりの頃の私は、日本の礼儀や文化など、テキストの内容以外は本当に何も知らない外国人でした。自分なりに改善しようと思っていても、時間的に、そして費用的に困っていました。そこで感動したのは、学校は私のような留学生のためを思い、年に2回、大学全体と学部とでそれぞれに留学生のために一泊二日の旅行を行うことです。おかげで、私はいろいろな見物と見学会ができまして、日本の文化、及び日本の歴史も、身をもって感じることができました。

普段の学校生活も、細々したところで、我々留学生への心遣いの部分が沢山あります。先生たちが留学生に対してとても親切で、質問されたら、説明の方法を変えて、私たちが納得するまで説明してもらいました。更に、「異文化コミュニケーション」という授業で、留学生と日本人の学生が交流するチャンスを与えてもらつて、日本人の友達だけではなく、他の友達も沢山できました。

いろいろな国の友達と交流し、お互いに母国の文化を伝え、留学生は勉強のために留学していることは勿論、母国と日本がお互いに理解するための架け橋でもあるということに気づきました。そ

人文学部 法経政策学科 4年  
邵新宇さん



のために、日本人の友達に誘われて、山形市の花見や、花火大会や、そして、山形の花笠祭りにも参加させてもらったことを、積極的に中国にいる両親や、友達に伝えて、写真やビデオなど沢山見せました。そして、山形大学に入り、日頃の学生生活で、周りの日本人の先生や同級生たちがすごく優しくしてくれたこと、その暖かさを感じたことも理解してもらいました。

勿論、山形に来た当初の目標は日本式会計学の勉強と中国会計学との比較です。この目標は、この3年間の大学での勉強を通じて、先生方のご指導に基づき、達成に向けて、少しずつですが、確実にマイルストーンを踏みながら進めてきました。この3年間を振り返ってみると、この成果は大学側と地域の皆さんのおかげです。

ここまで思いつきで書いた文章で、分かりづらいですが、言いたいことはただ一つ、「日本に来てよかった、山形に来てよかった、山形大学に来てよかった」ということです。この留学生活を通じて、学業、日本式の考え方、国際的な人との接触方法、違う視点での物事の見方の勉強をさせていただきました。まだまだ未熟ですが、山形県の住民として、そして、山大の卒業生としての誇りを持って、卒業まで学んだことを今後の仕事と生活を通じて活用し、立派なグローバル人材として更に頑張っていきたいです。

## 交換留学プログラムの利点

私はロシアからの留学生です。今年日本へ来て良かったと思います。私は日本に来る5年前にアメリカ留学の経験があり、以前から海外について勉強することが大好きでした。

私はすでに5ヶ月間、山形に住んでいます。これまで日本での生活で、特別な経験をしてきました。山形大学は非常に素晴らしいと思います。キャンパスはとても便利です。山形はとても静かで緑が多い街です。大学の周りに住んでいる人たちはとても親切で、いつも助けてくれます。私はこの留学生活のすべてが本当に大好きです。この交換留学のおかげで私は、日本の文化や人々のライフスタイルへの理解も深めることができました。

日本文化の授業で一番思い出に残っている経験は、留学生の友達や先生と花見や温泉、着物の着方などを学んだことです。私は本当に日本文化が気に入りました。そして、日本語の授業では日本語だけでなく、留学生のクラスメート達とお互いの文化についても勉強する機会がありました。このような体験は非常に面白くて楽しかったです。

ブリヤート国立大学、ロシア  
ラリーサ・ウコーエバさん



山形大学での出来事は、私の今後の人生と将来のキャリアの選択肢に大きな影響を与えました。私は、卒業してから希望する職業を、やっと決めるようになりました。

また、この交換留学は、いろいろな国の人々の様々な文化を学ぶのにも役立ちました。留学のプログラムは学術研究のみならず、人々を精神的にも成長させます。将来的には日本語能力試験のために勉強していくと思います。ここに来なかつたら、私は日本文化に深く飛び込むことができなかつたでしょう。私は非常に多くの興味深い人々に会い、生涯の友人をたくさん作りました。本当に良かったと思います。

# 人文学部外国人留学生実地見学旅行

## 中尊寺、松島と津波被災地への旅

大学院社会文化システム研究科 1年  
王 燦さん

7月15日と16日に実施された人文学部外国人留学生実地見学旅行に参加しました。今回の旅行を通して、地元の文化と風習を直接に体験することができました。院生生活の中で、とても楽しい思い出となりました。

旅行の初日には、岩手県の中尊寺へ行きました。天台宗の寺院です。平安時代に建立された金色堂をはじめ、いろいろと貴重な芸術品を見学しました。金色堂は美術、工芸、建築の粹を集めたものだと思います。素晴らしい芸術品です。私が大好きな俳句詩人松尾芭蕉の彫像も見ました。昼食は気仙沼のホテルで食べました、美味しかったです。昼食後、震災についての講話を聴きました。気仙沼の地震と津波の当時の映像も見ました。

午後にはホテルの周りを散策しました。被災地の見学です。2日目の午前にも石巻市の被災地を訪ねました。津波が来た後の痕跡が残り、津波で壊れた建物も見ました。こんな大きな地震に直面し戦っている被災地の人々は将来、さらに勇敢になることでしょう。心から、被災地の復興と人々の幸せをお祈り申し上げます。

夜には松島のホテルに宿泊し、みんなと一緒に



被災地見学（石巻市）



松島にて



船上からカモメに餌やり

に食事とお酒を楽しみました。私は日本酒が大好きですので、大いに飲みました。このホテルは港のすぐ近くで、大変よい風景でした。

旅行の第2日は、「日本三景」の一つの松島を参観しました。遊覧船が就航していて、船上より島々を眺めることができます。島の上に松などの植物がたくさん生えており、海、島、青空の組み合わせは完璧な絵のようです。船上からカモメに餌やりをするのはとても楽しかった。当日、瑞巣寺も参観しました。私は日本の戦国時代の歴史物語が好きですので、伊達政宗のゆかりの地を参観できたのは、ほんとうに嬉しかったです。

留学時代のこのような見学体験は貴重な思い出です。学部3年生の交換留学生の時、福島県を見学したことがあります。今回は2回目ですが、ほんとうに楽しい体験です。来年は、修士論文と就職活動で忙しくなる見込みですが、是非参加いたします。

## 留学レポート（コロラド州立大学）

人文学部 法経政策学科 3年  
佐藤修平さん

「People don't want to know how fluently you speak English, but they do want to know what your ideas are.」これは私がアメリカで留学していたときにミャンマーからの留学生から言われた言葉です。彼に言わせれば、英語が流暢にしゃべれるかどうかは重要ではなく、自分自身の考えを常にはっきりと持つことがなにより大切だということです。この彼の言葉はアメリカで留学中も私も心に強く響きました。

私は去年の8月から今年の5月までの約9ヶ月間、アメリカ合衆国のコロラド州立大学に英語と経営学を学びに留学をしました。初めての長期にわたる海外生活でしたが、自分でも驚くぐらい、ホームシックや海外の生活で不安になることがなく、あっという間に時間が過ぎていってきました。この理由としては、私自身にとって新しい文化や環境に遭遇するということは面白いものである。また、素晴らしい友達に巡り合えたことです。

前述に紹介したミャンマーからの友達とは毎日、大学の講義が終わってから遊びに行ったり、勉強したりしました。アメリカの日常生活の中で学ぶことはたくさんありました。彼からは本当にたくさんのことを学びました。ミャンマーからのその友達の考え方、英語が多少拙くても、しっかりと自分の意見を持っていれば言語の能力の低さ



ハロウィンパーティにて



クリスマスパーティにて



日本語を勉強している学生と

を補うことができるという考えかたでした。それを言われるまでは、私はただうまく英語を話すことに集中していました。たしかに意識をしているせいか格段と英語がうまくなったのですが、何かが欠けているふうに感じました。その欠けていたものが、「自分自身の考え」だったので。いつのまにか、英語を話すことが「目的」になってしまい、本来の目的、「自分の意見を伝える」がないがしろになっていたのです。そのことに私の友達は気付かてくれたのです。また、その友達曰く、これからはどういう場面でも世界と「競争」するのではなく、「協力」することが大事になってくるとも言っていました。私の友達の考え方はとても新鮮でおもしろいものばかりでした。

約9ヶ月間の留学を通して、語学力も格段に上がりました。でもそれ以上にミャンマーからの私の友達を筆頭に多くのかけがえのない友達にめぐりあえたことがとても自分自身を成長させてくれたと確信しています。彼らと将来、世界がよりよい方向にいくように何かができると思います。

# 地域とともに

## 今年度の公開講座

### ◆前期公開講座(人間文化学科)

#### イメージの詩学— ヨーロッパを解く



人間文化学科  
相沢直樹教授

公開講座「イメージの詩学—ヨーロッパを解く」は、6月中の月・木の5日間にわたり開催されました。企画を任せられたとき、このところ「言葉」をめぐる講座が続いているので、すぐに「絵」がらみで行こうと決めました。講師陣には絵と言葉のコラボレーションだとか、詩的なものとイメージのせめぎ合いなど、両方にまたがるお話をしてくださいとお願いしました。結局、時代的にはルネサンスから現代まで、地域的にはイギリス、フランス、イタリア、オランダ、ロシアの絵画や写真を題材に、5名の講師が縦横無尽に語り尽くし、50余名の受講者の方々には、有名な絵から珍しい図像まで、絵解き・謎解きを存分に楽しんでいただけたと思います。

今回の公開講座には一般の方々のほか、本学の学生、卒業生、職員、さらに高校生からも参加があり、会場はいつにない熱気に包まれていました。学部公式のホームページとは別に用意したウェブページをご覧になっての応募もありました。新聞社への電話かけを怠ったにもかかわらず、多数の受講生をお迎えされたのは、やはり講師陣の人気の賜物でしょうか。

#### 【受講生の感想】

#### 感謝とともに

三井満喜さん(山形市)

時代はルネサンスから現代まで、行き先はイタリア、オランダ、ロシア、イギリスそしてフランスと、私たちは先生方の案内でヨーロッパ五日間時空旅行に出たかのようでした。多彩なご講義から、それぞれの作品が持つイメージがどこから来たのかを学ぶことができました。ある作品が気になってじっと眺めたり聴いたりする時、作中イメージの源を知ることで、その味わいに別の趣が加わるよう思います。また作者、作者と関わる人にはもちろん、表現を巡る論争、これらの舞台となった社会と時代にはエネルギーが溢れているのだなあと感じました。私たちもイメージ周辺から生じる「なぜ?」というエネルギーに惹かれて講座に集ったかもしれません。

私は父と親子二代の受講生です。父は以前から公開講座によく通っており、元気なら「イメージの詩学—」もきっと聞きに来ていたことでしょう。学校を卒業してしまえば、先生方のご専門の話を伺える機会はそうありません。学びの場、大学への憧れ。昼間は学生たちがいた教室で、同じ机で講話を聞く幸せ。顔なじみの受講生と一緒に言交わす楽しみ。公開講座で様々な学びに触れさせていただき、山形大学と先生方に父の分も重ねてお礼を申し上げます。

人文学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

### ◆後期公開講座(法経政策学科)

#### 私たちの暮らしと経済

法経政策学科 下平裕之教授

平成24年度後期の公開講座(法経政策学科)「私たちの暮らしと経済」では、私たちが暮らしの中で直面する具体的な経済に関する問題を素材に、それがどのように日本や世界の経済の動きと結びついているか、また問題が生じる理由やその解決策について考えました。

講座では、景気の見方とその考え方、国・地方自治体の財政再建問題、円高と日本経済、生活保護を中心とした失業者に対するセイフティ・ネット、中心市街地活性化という5つのテーマを取り上げられました。一連の講義を通じて、私たちの毎日の暮らしがどのように日本や世界の経済の動きから影響を受けているかということや、そのような動きを正しく理解するためにどのような視点や知識が必要とされるかということが明らかにされました。

今回は受講生の皆様にも身近なテーマであり例年以上に多くの方々に参加していただき、「わかりやすい講義だった」「経済に関する見方・考え方の基礎から理解できて良かった」という感想を数多くいただきました。また講義後の質疑応答も非常に活発でした。改めて受講された皆様にお礼申し上げます。



「国・地方自治体の財政再建問題」(第2回)の様子

#### 【受講生の感想】

\*今までわかっているようでしっかりとわかっていないかった、DIなどの景気動向指数について、基本的なところから教えていただいてとても良かったです。ありがとうございました。

\*まさに自分の問題であるはずなのに、今まで全くわからずにいた経済用語や景気動向の考え方について知ることができて、とてもすっきりしました。初步的なことからわかりやすく教えていただいて、楽しかったです。

\*円高が続く今、日本経済にどのような影響が出るのかを噛み碎いた表現でわかりやすく解説して下さったので、大変理解が進みました。

\*生活保護に関する山形市の実例など、具体的な数字をもとにしたお話を通じて、単なる机上論ではない、生きている経済を実感できた。

\*経済学の用語である「公共財」「外部性」について詳しい解説を聞いて良かった。中心市街地の公共性についてもっとくわしく学びたいと思いました。

# ホームカミングデー 2012

平成24年10月20日(土)、「ホームカミングデー 2012」が開催されました。当日は多くの卒業生が母校である本学を訪れ、恩師や旧友に再会したほか、在学生とも交流を行いました。ここでは、2つの「ゼミ懇談会」の様子を紹介します。

## 人間文化学科「芸術・表象系」

人間文化学科「芸術・表象系」懇談会では、自己紹介、学生時代の思い出話とつづいた後、「大学で勉強したことは役に立っているか」という話題になりました。

**中村:**大学で勉強したことは、役に立っていますか?実は最近、ある授業で「表象文化論って何の役に立つんですか」と質問されて、そういう考え方をしたことがなかったので少し困ったんですが、「仕事以外の時間に役立ちます」と、これははじめに答えました。もちろん仕事は大事ですが、人生はそれだけではない。いろんなできごとを私達は見たり聞いたりして生きていくわけで、そういう時、芸術作品や文化現象を細かく分析、考察する訓練をする表象文化論が大事な局面は多いと答えたのです。みなさん

はどうですか?

**青木:**役所に入ると、卒業した学部を参考に配属先が決まったのか、私の場合は人間文化学科卒業ということで文化担当の部署へ配属になりました。今は国際交流の業務もある部署にいて、中

対談者:  
青木一美さん  
平成18年度卒。  
卒論ではウェ  
ブツニアを研  
究。現在、長井  
市役所勤務。

国とドイツにある友好姉妹都市と交流をしています。そういう点では卒業後も仕事につながっているなあと思います。



司会:  
中村唯史教授  
専門はロシア  
文学・表象文化



対談者:  
佐藤早苗さん  
平成23年度卒。  
卒論では「アメリ  
カのバイリンガ  
ル教育」を研究。  
山形大学勤務。  
現在は医学部附  
属病院に配属。

**佐藤:**病院に海外の方が来られたこと  
があって、私が通訳をすることになりました。カタコトの英語で説明をして、なんとか分かっていました。ちょっと英語をかじっておいてよかったなと思いました。

**阿部:**でも、役に立たなくても無駄ということではないですよ。卒論のときに、「卒論まであと○○日」とかかけて、みんなで苦しみながらも



対談者:  
阿部宏慈教授  
専門はフラン  
ス文学・表象文  
化

楽しそうにやっていたのが、たいへん印象に残っています。そして出来上がったものも、その楽しさに満ちあふれていたなという感じがします。その

代わり、それが役に立つかというと…役に立たないことが多いんですよ。(笑)



## ホームカミングデー経済系懇談会報告

法経政策学科 3年 鈴木 小百合さん

経済系ゼミ懇談会は卒業生・在校生と立松先生を含め17人で行いました。50代の方～近年の卒業生まで幅広い世代の方と交流することができました。まず参加者の自己紹介を行いその後自由発言という流れでした。時間が15時半から16時半までという短い時間だったので大半が自己紹介で終わってしまいましたが、学生時代の思い出、今の仕事の紹介、仕事で苦労していること、仕事とのギャップなど大変貴重なお話を聞くことができました。

卒業生の就職先は公務員(町役場、警察官)、大学職員、金融保険、製造業など多岐に渡っていました。次に懇談の内容を記していくたいと思います。

県内の町役場にお勤めの先輩は防災・生活環境課という課に所属して今年で4年目になるそうです。東日本大震災の廃棄物処理の仕事も6月から近隣の市町村と共同で行っており、それには放射線量を計る仕事も含まれているということでした。

民間企業に就職された最年長の先輩は和気あいあいとした学生時代の様子を語ってくださいました。ゼミは輪読中心であったこと、経済ではマルクス経済が盛んだったことをお聞きしました。学生時代で一番思い出に残っているのは専門への移行の際の蔵王での宿泊研修だったそうです。

ここからは近年の卒業生のお話です。今年山形大学職員に採用された先輩は仕事にやっと慣れ始めたこと、仕事をやりつつ趣味のラグビーも続けていて充実した生活の様子を話してくださいました。

県内の損害保険会社で働いている先輩は自動車など私たちの身のまわりにあるリスクを補うための仕事をしていること、仕事内容が難しいこと、仕事と生活のギャップなどについて話していただきました。

もう1人の先輩からは10月末で今の仕事を辞め、新しい道に進む準備をしているというお話を伺いました。就職前に描いていたイメージと実際の仕事とのギャップが大きかったこと、就職活動を行う際は、雇用安定や金銭面の視点だけではなく、やりがいを持ってできるかを考える必要があるというお話を聞きしました。これから就職活動を始める在校生にとって参考となる話をたくさんしていただきました。

私たち在校生が卒業生と交流できる機会というのはそう多くありませんが、同じ山形大学を卒業し活躍されている先輩方の話はとても勉強になりました。また、大学生活での思い出を語ってくださる先輩方のお話を聞くと、今の学生生活を有意義に過ごしたいという思いもより一層強くなりました。



# QUIZ

この絵は江戸時代のものですか、  
現在の山形市のどの町を描いたものでしょか?

\*答えのわかった方は人文学部1号館2階事務室またはゆうキャンパス(山形駅東口からすぐ、ミスターードーナツ並び)にお越し下さい。  
先着30名様に特製の人文学部グッズをプレゼントします。



安藤広重筆「湯殿山道中略図」(山形大学附属博物館所蔵)

この絵は安藤広重筆「湯殿山道中略図」です。山形の画家霞峰の下絵になるものを天保頃に広重が模写したとされる版画で、湯殿山参りの案内図として全国に配布されました。西から東をみた構図で、背景の山々の所には藏王山、高湯(藏王温泉)、龍山、千歳山、笹谷峠、山寺などがデフォルメされて描かれています。手前の町並みには出羽三山の参詣者を泊める行者宿(道者宿ともいう)白柱の看板を

立てている所)や土産物屋、酒屋などが並んでいます。手前(西)から左(北)へ曲がる道は羽州街道で、奥(東)から来る笛谷街道と交わり、菅笠に白装束の参詣者や旅人、物資を運ぶ馬などが行き交っています。江戸時代の後期に上方と奥羽地方を結ぶ中継商業や三山参りで賑わっていた山形城下のなかの、ある町の様子が活写されています。(法経政策学科 岩田 浩太郎 教授)

## 人文ニュース

今期、人文学部で行われたイベントなど、主要なニュースをお届けします。

### 株式会社ヤマザワ 山澤 進会長による特別講義



7月18日(水)の法経政策学科科目「マーケティング」(担当:伊藤嘉浩准教授)において、株式会社ヤマザワ代表取締役会長の山澤進氏から特別講義をしていただきました。これは、「広く組織におけるマーケティングについて基礎知識や基礎理論を習得する」ためのケースメソッドの一環として行われたものです。受講した学生は、東証一部上場企業で当方地方有数のスーパーを一代で築かれた山澤氏の経営理念と手法を学びました。

講義後は、「他社との価格差について」、「夕方時の値引きの根拠について」、「お客様数の動向について」など積極的な質疑応答が行われました。

※本学部の最新情報については、ホームページをご覧ください。山形大学人文学部 <http://www-h.yamagata-u.ac.jp> 渡辺将尚 阿部未央 ○発行日／平成24年12月14日  
〒990-8560 山形市小白川町1-4-12 電話023-628-4203 (人文学部事務室)  
<http://www-h.yamagata-u.ac.jp/agora/index.htm> E-mail : [jisoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp](mailto:jisoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp)

※本学部の最新情報については、ホームページをご覧ください。山形大学人文学部 <http://www-h.yamagata-u.ac.jp>  
※昨年度で退職・転出された教職員、今年度の新任教職員のご挨拶は順次ホームページに掲載する予定です。

リサイクル適性  
この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。